

まえがき

この本は、唯物論と観念論を統一する“物心一元論の哲学原理”を根本から解き明かすために、自分なりの考え方を展開するかたちで、《心と物世界》の主客相関の基本論理をできるだけ理解しやすく説明しようとしたものである。そして、それはそのまま、現代においてもなお支配的な、デカルト流の《物心分離》の主客二元論を克服する、新しい《主観—客観》構造を具体的に展開して、正しく定式化する課題へと深くつながっている。

そのため、本書は、物は《あらかじめ存在するから知覚される》のか、それとも、物は《あらかじめ知覚されるから存在する》のか、という類書にはない独自の仕方の問題提起をすることによって、きわめて特色あるものになっている。前者の考え方をすれば、私たちは唯物論や実在論の哲学的立場をとることになる。後者の考え方をすれば、唯心論や観念論の哲学的立場をとることになる。

さて、皆さんなら、どちらの立場を選ぶであろうか。なかには、同時に両方の立場をとりたい、という人がいるかもしれない。そして、この欲張った、しかしもっとも難しい立場こそがじつは正解なのである。この本も、その観点から書かれている。唯物論と観念論のいずれの考え方にもそれぞれ正しい一面があり、それゆえ両者の根本対立を和解させて、そこに物心一元論という“新しい統一哲学”を築きあげるのが、あるいは、その原理的土台だけでも明らかにしようというのが、本書全体のめざす最終の目標である。

物心一元論とは、唯物論と観念論がもつ合理的な側面を、それぞれ積極的にとりいれた統合哲学であるから、これが確立されるならば、これまで未解決の存在論—認識論上の哲学的問題も、その解決

へむけて大きく前進するにちがいない。それだけでなく、量子力学の観測問題にみられる“量子実在とはなにか”、また、脳科学では“物が「ある」と「見える」の関係はどう究明され説明されるのか”といった科学上の諸問題などにも、新しい物心一元論の視点から、いままでの哲学以上になんらか有効な寄与ができるかもしれない。心と物世界の関係いかにかわる観念論と唯物論の根本対立を、じっさいに止揚（廃棄と保存）するかたちで統一して見せているこの本も、これらの諸問題にわずかではあるが触れている。

筆者にとっては、デカルトの“物心分離”の近代哲学に端を発して、現代哲学にもいぜん引き継がれたままの“主客二元論”を乗り越えることは、そのまま“唯物論と観念論”を統一することであり、さらには“物心一元論”を確立することであって、三つの課題はおなじ一つの哲学目標にほかならない。それだけに、この哲学的課題をやりとげるためには、従来の諸哲学には見られない新しい概念、新しい概念装置を、私はどうしてもいくつか考え出さないわけにはいかなかった。

たとえば、パークリの存在次元、あるいは日常の存在次元、さらには第一次知覚と第二次知覚、感覚存在および知覚物という新しい諸概念、あるいは、知覚現在・知覚中断・知覚捨象、また絶対的パークリ次元といった概念装置など、こうした多くの諸カテゴリーが本書のいたるところに登場する。そして、生き生きと活躍してみせる。おそらく、皆さんは、この興味ある“知的光景”を、この本の全体にわたり自分の眼でしっかりと確かめることができよう。

一言でいえば、本書の最大の特徴は、近代の観念論哲学者として悪名高いジョージ・パークリの学説を大いに評価して、これをすすんで支柱にしている点にある。つまり「存在することは知覚されることである」という、あの《存在即知覚》命題が、この本にとっては決定的な重みをもっているということだ。とって、私自身はい

ままで観念論者であったことはないし、もちろん、いまでも観念論者ではない。それにもかかわらず、将来の新しい哲学は、バークリの《存在即知覚》命題がもつ合理的な契機をすすんで受けいれて、これを積極的に利用しないでは、もはや現代的な有効性をいささかでも獲得することができないだろう。この現代の哲学におけるいわば“パラダイムの根本転換”——バークリ命題に依拠して物心一元論を構築する——というべきものの不可避性を、私はこれまでの長い哲学研究のなかで身に染みて感じとってきた。それが具体的にどうということかは、この本を一読されるならば、皆さんは、ただちに、しかも十分に納得して理解されるにちがいない。

いずれにせよ、哲学における概念枠ぐみの根本転換をもたらせるものこそは、物と心、主観と客観、唯物論と観念論とを、それぞれの“同一性と区別性”の統一において捉えきる物心一元論の哲学にほかならない。それは、デカルト流の近代哲学の“物心二分法”すなわち“主客二元論”の批判的対極に位置するものである。

もとより、以上の積極的論点はこれまでにも、多くの哲学者たちによって熱心に主張されてきたのは事実である。しかしデカルト的な“物心二元論”の哲学的限界を指摘しつつ、時代の新しい考え方としての“物心一元論”をとなえる哲学者がいるのは疑いないとしても、それでは、その具体的内容をまでじっさいに展開して説明してみせた哲学者は、いったい、どれだけいるであろうか。

それはともかく、もし皆さんが、たとえば外国の最新の哲学状況はどうなっているか、どのような哲学流派が活発であるか、また、どのような哲学者たちが活躍しているか、いま国外の哲学の主要な問題関心はなにか、そういった諸情報を求めているのであれば、この本はそうした期待にはとても添えそうにはない。本にはそれぞれの役割があろうというものだ。そういう意味では、この本はあくまでも哲学の最深部の原理的な問題にのみとりこんでいる。外国の諸

文献をいくら漁っても正解はみつからず、ひたすら自分の頭をもちいて、自分流の考えを展開して解決するしか手だてがないような、しかも最高度に普遍的な存在論—認識論上の諸問題を扱っている。

数年前に、私は著作『存在と知覚』（2006年、法政大学出版局）を刊行した。そのあと、私はその続編をなんとか書き継ぎたいと仕事をつづけたが、そのとき、たまたま出会ったのが、哲学者・佐藤信衛（1905—1989）の遺稿『心』であった。うかつにも、この人について、私はその名前すらも知らなかった。著書『心』に記載された年譜によると、佐藤信衛は法政大学で長いあいだ哲学科の教員として教鞭をとられていたようである。もっとも、その間、小林秀雄や林房雄、中村光夫などと一緒に『文学界』同人としても、20年にわたって活躍しつづけたそうであるから、おそらく異色の哲学者であったのだろう。

この本は、その佐藤信衛の著作『心』から貴重な示唆をえている。もっとも私自身の根本の考えは、『存在と知覚』を書きあげたときすでに大方は仕上がっていたから、『心』の影響はもうすこし別のところにある。佐藤信衛と私とは、哲学上の問題関心という点ではかなり共通するものがあつた。佐藤は、心としての感覚から出発して、その感覚「見る」を中心にすえるかたちで、物や自然の世界の客観的な実在性をなんとか確実に論証してみたい、と考えていたようである。そこには、これまでの実在論風の哲学にたいする強烈な批判意識がみられるが、しかし佐藤信衛の考え方は、いわゆる観念論とはまったく無縁である。佐藤がきびしく論難したのは、これまでの唯物論や実在論の哲学が、人間の感覚を、物のたんなる“写し”であるとみなして、それをすこしも疑わない点であつた。しかもここでは、物は、物そのものとされ、感覚や知覚からまったく独立してひとり外に「ある」とされている。そして、この意味の物そのも

のと感覚のあいだに一種の“写し”の関係を想定して、これに全面的にもたれかかる哲学体系について、それはごく不確かな“写し”なる仮定にもとづいているとして、佐藤信衛は痛烈に糾弾しているのである。

こうして見てくると、私が『存在と知覚』で展開した哲学の原理をめぐる問題意識と問題提起の仕方との共通性はあきらかである。

とはいえ、佐藤信衛の『心』を読むなかで、自分の議論には、とくに“感覚”について哲学的思索の深みがいまだ十分でない事実、私はすぐさま気づかされたのであった。そこで、私は、自分独自の哲学的感覚論ともいうべきものを、どうあっても仕上げざるをえなくなつた。その苦心の諸成果がどのようなものかは、本書の第5章にすべて展開されている。私は、佐藤信衛の“感覚”をめぐる議論を自家菜籠中のものにしたうえで、物心一元論の立場から自分流の哲学的感覚論の出発点になるものを新たに構築したのである。

しかしながら、哲学原理にかんする佐藤信衛の興味深い問題意識と問題提起にもかかわらず、私の意見では、かれはその最終の問題解決の局面では、あきらかに正しい理論処理に失敗したといわざるをえない。たとえば佐藤は、心から出発して「見る」と「ある」の関係を追究するかたちで、太陽の客観的実在性を哲学的に論証しようとして努力した。残念ながら、その原理論は挫折するしかなかった。やはり、決定的な議論場面において、たとえば感覚存在と感覚の二重性、知覚物、あるいは第一次知覚と第二次知覚、さらにはパークリ次元と日常次元といった新しい概念、新しい概念装置が欠如したのでは、どうにもならなかったのである。

そして、私の本は、佐藤信衛の存在論と認識論が挫折した、まさにその時点から、正しい問題解決をめざすかたちで始まっている。「写し」の考え抜きに、感覚「見る」と存在「ある」の関係、すなわち、《心と物世界》の関係のなんであるかを追究する佐藤信衛の

“太陽の客観的実在性の哲学的論証”は、なにゆえ成功しなかったのか。ある意味では、この本の全編がこの疑問の解明にむけられている。なぜなら、そのことが同時に私には、《心と物世界》の関係をめぐる唯物論と観念論の対立の解消をめざす、物心一元論の構築それ自体をそのまま意味するものだったからである。

佐藤信衛の遺稿『心』ではほとんど検討されていない重要な問題のひとつに、《主観—客観》構造にかかわる問題がある。国内外の哲学界では、《主観と客観》の区別をすら疑問視する哲学的な流れがあたりまえとされる昨今である。これが近代の主客二元論を克服する動きのひとつになっているのは疑いない。私は、後者の二元論批判にはもろ手をあげて賛成である。しかし前者の《主観—客観》の枠組みそれ自体をまで問題視する考え方には、いささか首をかしげざるをえない。正しい意味における《主観—客観》構造を認めないでは、現代哲学は近代哲学からの最良の理論的遺産をまで放棄するようなものだ、と私はつよく確信している。

この本では、正しい意味の、真の《主観—客観》構造とはなにか、という問題がほぼ全体にわたって追究されており、皆さんにおすすりめできる十分な内容になっている。そこでは、《主観—客観》関係がなぜ生まれたか、主観とはなにか、客観とはなにか、といった諸疑問が物心一元論の立場からくわしく説明されている。とりわけ、私たちがふつう“物あるいは物世界と呼んでいるもの”もまた主客構造をもっている、という指摘は、パークリの《存在即知覚》命題を基礎にすえた物心一元論の立場からのみ展開可能であり、皆さんの哲学的関心と興味を大いにそそるものがあるだろう。

それを考えれば、主観と客観の区別を軽視ないし否定するところに、現代哲学を確立しようとする分析哲学（プラグマティズム）や現象学、ポスト・モダンなどの哲学的動きは、私にはとうてい尋常なものとは思えない。《主観—客観》関係については、従来の近代

二元論の主客関係とは別に、物心一元論の新しい主客関係の確立が可能である点が見逃されているという哲学的事実において、否定派の哲学者たちの理論的消極さはどうにも打ち消しようがない。

主観と客観は、《主客同一でありながら、しかも客観は主観から独立している》という矛盾した形において、つまり弁証法的な仕方をもってあきらかに新しい主客関係を形成しうるのである。これは主客の同一性を前提にしている点では、これまでの硬直した二元論の《主観≠客観》分離構図とはまったく異なるものだ。それゆえ、問題の核心は、そうした主客の“同一性と区別性”の対立の統一を実現する新しい“主客モデル”をいかに具体的な姿において構築して定式化するか、という点にある。私が思うに、現行の哲学者たちの多くは、わずかの例外者を除けば、そうした根本課題の存在すること自体についてすら、かならずしも明確な理論的自覚をもちあわせてはいないようだ。

本書の第3章において、新しい主客モデルの定式化という目標とその実現は、おそらく十分に果たされている。心と物世界、感覚と存在、主観と客観、さらに観念論と唯物論の二元的対立を克服して、二つのものを正しく統一する物心一元論の哲学的核心は、その新たに確立された《主観=客観》構造のなかに、はっきりと見てとれるとあってよい。重要なことは、それとともに、物心一元論がまた、真の意味の《知覚の構造》を探りあてた、という事実である。それが具体的にどういうことかは、ここで説明するのが適当とは思われない。

物心一元論とはなにか
心と物世界の主客相関の哲学

目 次

まえがき 3

第 1 章	現代哲学の根本問題とはなにか	17
	——主客二元論の克服と物心一元論の確立——	
第 1 節	主客二元論をめぐる哲学的・科学的な諸問題	17
1-1-1	近代の自然科学および哲学における主客二元論	17
1-1-2	ジョージ・バークリの《存在即知覚》命題の哲学的意味	20
1-1-3	哲学の出発点は“主客の交流点”にある	21
1-1-4	感覚から出発していかに物へと到達するか	23
第 2 章	《主観—客観》構造の哲学的分析(1)	27
	——物が「ある」と物が「見える」の関係について——	
第 1 節	物は《存在するから知覚される》のか、それとも 《知覚されるから存在する》のか	27
2-1-1	哲学の問題がすべて収斂していく究極の原理問題とはなにか	27
2-1-2	「心の外の物」はまるでわからないものである	28
2-1-3	本書の最終目標は《唯物論と観念論》の統一としての物心一元論 の確立にある	29
第 2 節	バークリの存在次元と日常の存在次元	31
2-2-1	物が「見えない」と物が「ない」とは存在論的にどう異なるか	31
2-2-2	「可能的な未存事物」と「現実的な既存事物」を区別する	33
2-2-3	従来の唯物論の決定的な敗北はまぬがれない	36
2-2-4	物とは《感覚と存在》の分離不可能な関係性そのものである	39

第3節 私たちにまず与えられるのは感覚であるか、それとも物であるか 41

2-3-1 主観的な《感覚》は同時に客観的な《物》である／41

2-3-2 「感覚存在」という概念と「感覚の二重性」という概念／44

2-3-3 物は感覚存在の複合体であり知覚物である／46

第4節 脳活動の結果として世界は「見える」から「ある」といわざるをえない 47

2-4-1 心の中から心の外へいかにして出るか／47

第5節 パークリの《存在即知覚》命題は量子実在の世界を哲学的にどう説明するか 51

2-5-1 量子実在の世界は「知覚されるから存在する」領域にある／51

2-5-2 量子実在の世界では唯物論と観念論は統一されている／55

第3章 《主観—客観》構造の哲学的分析(2) …………… 59 ——新しい《主観—客観》モデルとはなにか——

第1節 物心一元論の《主観—客観》構図を考える 59

3-1-1 物自体主義と知覚実在物説——真の《知覚の構造》とはなにか／59

3-1-2 自分の知覚をもういちど外側から知覚するというパラドクス／62

第2節 正しい《主観—客観》構造が成立するための諸要件とはなにか 64

3-2-1 「第一次知覚と第二次知覚」という新しい概念／64

3-2-2 ふたたびパークリの《存在即知覚》命題について／68

3-2-3 物心一元論は二つの存在次元を統一する／71

第3節 正しい《主観—客観》関係はどのような論理構造をもっているか 72

3-3-1 新しい正しい《主観—客観》構造とはどのようなものか／72

3-3-2 「知覚現在と知覚中断と知覚捨象」という新しい概念装置／75

3-3-3 絶対的パークリ次元について／78

3-3-4 知覚現在式・知覚中断式・知覚捨象式のまとめ／82

第4章	《主観—客観》構造の哲学的分析(3)	91
	——物とはなにか——	
第1節	物が「ある」と「見える」の関係とはどのようなものか	91
4-1-1	二種類の《主観—客観》構造について / 91	
4-1-2	《感覚=存在》対象式における感覚と存在の関係 / 97	
4-1-3	物心一元論が新しい統一哲学であること理由 / 100	
4-1-4	「物がある」と「物が見える」のあいだの循環的構造 / 102	
第2節	物の二つの基本的属性「ある」と「見える」	106
4-2-1	感覚+思考=知覚、その知覚がそのまま知覚物としての存在である / 106	
4-2-2	「ある」と「見える」は物の二つの基本的属性である / 107	
4-2-3	パークリの存在次元と日常世界の存在次元 / 109	
第3節	物とはなにか	111
4-3-1	感覚存在から出発していかに心の外の物へと到達するか / 111	
4-3-2	哲学の最深部の原理問題——存在が先か、知覚が先か / 112	
4-3-3	唯物論と観念論の対立しあう命題をいかに統一するか / 116	
第5章	物心一元論の本質はなにか	125
	——哲学的感覚論および哲学の第一原理——	
第1節	哲学的感覚論を展開する	125
5-1-1	感覚とはなにか(1)——感覚存在と感覚の二重性 / 125	
5-1-2	感覚とはなにか(2)——感覚の自己言及のパラドクス / 134	
5-1-3	独我論の克服および感覚の自己外化としての物世界 / 136	
5-1-4	発生的には物が先であるが、論理的には感覚が先である / 140	
第2節	私の見る世界と君の見る世界はなぜ互いに一致するのか	142
5-2-1	私の見る赤色と君の見る赤色は原理的に比較不可能である / 142	
5-2-2	唯物論や実在論は「感覚の一致」問題をどう解決するか / 143	
5-2-3	物心一元論は「感覚の一致」問題をどう解決するか / 147	
第3節	哲学の第一原理について	151
5-3-1	感覚の二重性を《感覚≠存在》主客相関式で表わす / 151	

5-3-2 <<感覚≠存在>>原理式は“物と主客構造”を同時に表わす／156

第6章 知覚因果説の眞の哲学的意味はなにか …… 161
——物が「ある」(原因)と「見える」(結果)は同時的である——

第1節 いわゆる知覚因果説の哲学的問題 161

6-1-1 知覚因果説のあらまし／161

6-1-2 知覚因果説をめぐる決定的な問題とはなにか／163

第2節 知覚因果説の新しい解釈—眞の<<知覚の構造>>— 167

6-2-1 知覚因果説の有効性／167

6-2-2 赤いリングが「ある」と「見える」は相関的な一体関係にある／168

6-2-3 知覚因果説の新しい解釈を提案する—眞の<<知覚の構造>>／170

6-2-4 この章の終わりに／176

第7章 物心一元論と宇宙論の人間原理の哲学的考察 … 179

第1節 物心一元論を総括する(1) 179

7-1-1 物心一元論の哲学的な核心はどこにあるか／179

7-1-2 フッサールの現象学について若干／185

7-1-3 <<感覚≠存在>>主客相関式における<<存在>>の出自(由来)はなにか／187

7-1-4 マルクスは物心一元論者(感覚一元論者)であったか／190

7-1-5 マルクスとエンゲルスの唯物論の相違点について／199

7-1-6 唯物論の反映論(模写説)はその内部矛盾のゆえに原理的に不可能である／202

第2節 物心一元論を総括する(2) 212

7-2-1 物心一元論は感覚から出発して“太陽の客観的実在性”をいかに哲学的に論証するか／212

第3節 宇宙論の人間原理の哲学的考察 218

7-3-1 “人間の存在と宇宙の存在”の主客相関性／218

- 7-3-2 宇宙論は《人間原理》を科学的事実としてどう具体的に考えて展開するか / 219
- 7-3-3 現代の宇宙論がいう人間原理の哲学的な方面 / 222
- 7-3-4 絶対的パークリ次元の《□□=□□》≠《□□□□》主客絶対ゼロ式が表わす“存在しない宇宙” / 228
- 第4節 最後に本書全体を総括する 235
- 7-4-1 物心一元論とは唯心論と観念論の統一されたものであり、唯物論において観念論が止揚された《真の唯物論》のことである / 235

注 240

あとがき 251